

「旅行用水彩画箱の自作 (2)」

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所

田中 千尋 Chihiro Tanaka

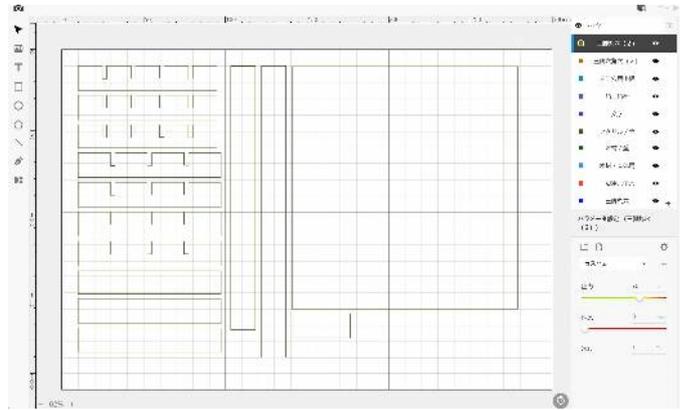
約 30 年間、どこに行くのにも一緒だった水彩画箱は、今年 5 月の石垣・八重山旅行を最後に「引退」させることにしました。たかが木箱なのだが、何となく愛着があって捨てられず、一応「予備」ということで、本棚の隅で保管することにしました。

「後継機」として自作する画箱には、引退した画箱の反省を生かして、いくつかの条件を設けました。

- (1) 外出や旅行に便利のように、小さくて軽いこと。基本的には桐材で自作する。
- (2) 旅先で「スケッチブックを置く場所」に困ったことが多いので、立ったままの姿勢でもスケッチブックをそのまま置ける設計にする。
- (3) 水彩絵の具の他、筆、ペン類、パステルなども余裕をもって入れられるようにする。
- (4) 混色用のパレットも内蔵する。



こうした「厳しい条件」をクリアして、「後継機」として完成したのが、この画箱です。外箱には、ワッツ (100 円ショップの一つ) で売っている「桐のまな板 (厚さ 10mm) をレーザーカッターで切り出したものを使いました。内部の仕切りには、透明アクリル板 (厚さ 2mm) を、やはりレーザーカッターで切り出したものを使いました。画箱そのものの材料費は 600 円程度でした。接着はすべて速乾性の木工用ボンドだけを使いましたが、強度は十分な仕上がりでした。



例えばこれは、アクリル板の切断設計ソフトの PC 画面です。0.1mm 単位で細かく設計できて、このデータをレーザーカッターに送信すると、ものの数分で正確に切り出してくれるのです。



水彩絵の具は厳選 20 色としました。私の場合人物画はほぼ皆無で、静物画もめったに描きません。ほぼすべて風景画なので、緑系、青系の色が多いのが特徴です。今回もホワイトは入れませんでした。絵の具も国産の比較的安いチューブ絵の具です。画箱の仕切りに入れて一週間も乾かすと、そのまま固まります。油絵の具とちがって、水彩絵の具は固まっても水で元の色が表現できるのです。



箱の底部には、三脚に取り付け可能なねじを「標準装備」としました。これも、今回の石垣島・八重山列島旅行での経験から「採用」された新機構です。